

柳生兵庫助

津本
陽

2



津本陽

柳生兵庫助

2



柳生兵庫助 二

定価 一一〇〇円

昭和六十一年六月二十日 第一刷
昭和六十一年十月三十日 第六刷

著者 津本陽

編集人 川合多喜夫

発行人 吉沢孝治

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北
九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中区区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

検印省略

Printed in Japan

ISBN4-620-10302-0

	浮 舟	逆 風	魔	柳生兵庫助・目次（卷二）
	166	87	5	

装帧
锦田
幹

柳生兵庫助

二

魔

北風が吹きつづのり、小倉の沖合に白馬を走らせる荒れ日和が幾日かつづいたあと、凧なまきになった。

兵介主従は疋田ひつた豊五郎とよごろう父子、細川家の家士たちに見送られ、小倉から対岸の赤間関にむかう便船に乗った。

乗りあわせた客は二十人ほどであった。おおかたが旅装の町人で、比丘尼びくに、修験者が一人ずつ、家中の武士が三人いるが、いずれも城下に住む者で、身許みもとは知れていた。

兵介たちは帆柱の下に丸く巻いた蓆帆しよふにもたれていた。小猿と千世は客の様子をそれとなくうかがう。海上三里のあいだ、潮流にもまれて走る船上で、菓子を食らい談笑している彼らのうち、半ばは他国者であった。

「このなかに朱元結あけもつとこいの細作さいさく(間者かんじや)がひそんどるやろうか。誰がそれか、見当みあたがつけにくいのう」

乱世を生きてきた商人、百姓たちの面構おもてかまえはたくましく、荒んだおもむきさえあって、その気で見ればすべてが山賊やまだちであるように見えてくる。

小猿と千世は、ひとの唇のうごきで会話の内容を読む術をも心得ていたが、乗客の口もとを凝視すればあやしまれる。

「お千世はん、氣いつけてるんやぞ。そうすりゃ、そのうちに分ってくる」
小猿はささやく。

「廻国修業に出れば、あぶない目に逢うのはあたりまえじゃ。いまのお前たちのように気を張っておれば、くたびれるばかりやぞ」

兵介は二人に笑いかける。

「いや、そげなことはいうておれまへん。なんせ一大事でっさかいな」

小猿は緊張のいろを隠さなかつた。

門司湊よりも小倉から便船に乗るほうが、細作に尾行されにくいと思つていたが、相客あいきやくの数は、思いのほかに多い。

赤間関に着き、波止にあがると主従は町筋の茶店に立ち寄る。焼餅、団子が香ばしい醬油のにおいはなち、布子の袖をまくりあげた主人が、大団扇で煽いでいた。

店内の土間にならべられた縁台には、十数人の客が群れている。

「なぜかような店に寄るのや」

「ちと様子をうかがおうと思ひましてな」

小猿は不審げな顔の兵介のさきに立ち、奥手の縁台に腰かけた。

焼餅と茶を頼み、三人は板壁に背をもたせかける。

「軒先のよしずの向うに、立ち食いの煮売り屋がおまっしやる。そこで雑炊を食うとる頬かむりした奴は、さっき船に乗つてた男だす。あいつは旅姿やのに、さほどの荷も持たず、大脇差を差しとりまっしやる。私はいつが細作やないかと、思ひますのや」

小猿は獲物を狙う鷹の眼つきになつた。

くろずんだ麻布子、山袴に脚絆草鞋の男は垢染んだ臍をむきだした襷掛けの老婆から、大鍋の雑炊をふたたび欠け椀に盛りこんでもらつていた。

「うむ、なるほどそういえば、あの男の立ち姿は、なにやら気を張りつめているようにも見えるのう」

兵介は眼を伏せ、焼餅を食いながら小猿にささやく。

「ちと私が様子を見てきまっさ」

小猿は背負袋を手に、茶店の裏口から茶店の主人にさえ気づかれない、すばやい足取りで、忍び出る。

まもなく、汚れたんだ小袖の裾をひきずり、かぶりものの布を幟のように長く背に垂らし、埃まみれの足に草履をつっかけた中年女が、竹杖をついて街道にあらわれた。

女は雑炊を売っている煮売屋から、二間とはなれていない場所にへっついを据え、芋と魚の煮物を売っている立ち食い屋のまえに足をとめた。

巾着から銭をとりだして火吹竹で忙しく火をおこしている女に手渡し、芋を皿に盛ってもらい、その場でむさぼり食いはじめる。

「あれが小猿か」

「さようござります」

兵介は千世にたしかめ、小猿の化けかたの巧みさに感じいった。

小猿は芋を食い終え、立ち去った。彼は衣裳を着換える暇もなからうと思えるほどの早さで、茶店に戻ってきた。

「あいつはやっぱり朱元結あけもつとの手先にちがいはおまへん。雑炊食うて、洩はなすすりながら、ここの店先から眼え離しまへなんださかい」

「そうか、細作に相違ないのか」

「へえ、私の眼に狂いはおまへん。さあ、どう始末するかだんな」

小猿はひと呼吸ほどのあいだに、考えをきめた。

「よろしゅうおす。私はこの宿場を出て間もないうちに、あいつを始末しまっさ」
千世が聞く。

「なに使わはりますのや」

「これや」

小猿は握り拳を口にあててみせた。吹矢で射殺するのである。

「ほなら、参りまひよか」

三人は勘定を済ませ、茶店を出た。

つぎの府中の宿場までは、二里の行程であった。しばらく行くと、亭々と松樹のつらなる街道は、爪先上りになってくる。

「この先は山だんな。ほなら、ちとご免やす」

小猿は二人をあとに残し、小走りにまえに走り、見る間に曲り角に姿を消す。

兵介と千世はうしろをふりかえらず、ゆっくりと歩いた。

真昼の陽が頭上から照りつけ、地上に斑模様をおとしている。

坂道にかかると大樹の枝が頭上にさし交され、野鳥の啼声がするどく静寂をひきさく。小猿は得意の早歩きでたちまち兵介たちと六、七丁の差をひらき、辺りに通行の人影のないのを見すまし、道端のくさむらに身をひそめた。

彼は脇差を腰から抜きとり、傍の椋の大樹に立てかけ、鏢に足をかけ下枝にとりつくと、身をくねらせ這いのぼり、地上から二間ほどの葉を茂らせた大枝にまたがる。二間ほど

すばやい手つきで、彼は背負袋から何かをとりだす。それは銅製の吹矢筒であった。長さは一尺二寸である。

矢は六寸ほどの鉄針で、根元につけた風受けの紙筒に、綿に浸したとりかぶとの毒汁を仕込んでい

る。紙筒にあってゐる小穴から、毒汁がたえず針先に流れていて、矢が敵に命中すると、毒液が血管にはいり、瞬間に神経麻痺をおこさせるのである。

小猿は矢を筒に差すと、風の動きを計った。山肌は森閑と静まりかえっていて、葉ずれの音もなかった。遠方で鳩の啼く声がする。

風さえなければ、小猿には八間の距離から狙って、一寸角的に当てるのは難事ではない。

「さあ、木隠れの小猿の腕をみせてやるで」

彼は下緒を枝に巻いてつくった輪に身をいれ、幹に身をそわせて、下方からまったく姿がみえないようにした。

呼吸をひそめ待つうちに、兵介と千世の姿がみえてきた。二人が眼下に近づき、通りすぎてゆく。

小猿がどこに隠れているかは彼らには分らない。

兵介たちの姿が見えなくなった頃、さきほどの汚れた頭巾の男があらわれた、うつむきかげんに腰をおとした、旅馴れた足どりである。

男のほかに、街道を歩む人影はない。小猿は吹矢筒を口にあて、前を通りかかる男の首筋をめがけ、強くみじかく吹いた。

鉄針はまっすぐ男の右顎の下に突き刺さった。男は立ちどまり、眼をみはって首に手をやり針を抜いた。

彼はうろたえたように脇差の柄に手をかけ、かたわらのくさむらに逃げこもうとしたが、引きもどされたように立ちどまる。

足を踏んばり、見えない相手の引き手をふりはなそうとするかのような仕草をするうち、二、三度たたらを踏み、身のつりあいを失って地響きたてて倒れ伏した。

小猿は木のうえから滑りおりるなり、地面に耳をつける。誰かがくると知って、彼は男を樹下の茂みにひきずりこんだ。

小猿は屍体を笹の茂った窪みに横たえると、影のように足音を盗み、五間ほどはなれた樫の樹陰に身をひそめた。

地面を踏む湿った足音とともに、坂を登ってきたのは、一文字笠に脚絆草鞋の百姓である。蓑を背にかつぎ、小脇差を腰にうつむきかげんに道を急ぐ様子である。

ただの旅人かと気をゆるめかけて、小猿は笠の下で異様にはりつめた眼のかがやきを見てとる。

百姓は小猿のひそむ辺りまでくると足をとめ、道端を凝視した。屍体をひきずったときに折れた草を、見ているのである。

百姓は不意に、道のむかい側へ身を投げるように倒れこんだ。敵と分れば吹矢で倒そうと身構えていた小猿は、虚をつかれた。

草がうごき、百姓は四つん這いで逃げてゆく。

「やっばり、あいつも山賊じゃ」

小猿はすぐにあとを追わず、地に耳をつけ、相手の動きをたしかめた。

追う立場になれば小猿は絶対に相手を逃さない。地面の微細な変化をも見逃さず、どこまでも尾けることができる。

あやしい百姓は、さほど遠方へゆかず動きをとめた。十間ほどさきにおいて、なにかの変化があらわれないかと、様子をうかがっているようである。

小猿は身動きせず、しずかに膝をつき呼吸を弱め、完璧な木隠れの体勢になった。彼は腰帯に吹矢筒を差し、かわりに懐から磨ぎすました棒手裏剣をとりだした。

手裏剣には細い手貫き緒という撚り紐がついており、敵を刺したのち手もとにたぐり寄せられる。小半刻（三十分）ものあいだ、小猿は息をひそめていた。

百姓がようやく動きだしたので、小猿は地に腹這いになり、手裏剣を構えた。敵はひとりで、ほかに近づいてくる者の気配はない。

「やっぱりあいつは、仲間がやられたと気づいておるぞ。これは白人ではないような。いなかの忍びじゃな」

九州から山陰山陽道へかけての辺りは、朝鮮、明との交流が多く、伊賀流とは別派の忍術が大陸からもたらされていた。

百姓は笹原を這いすすみ、こちらに戻ってくる。おそらく屍体を置いた場所にむかってくるだろうと、小猿は読む。

手裏剣の尖端には銅をかぶしており、そこに伏子毒を塗っている。銅は鉄よりも毒液になじむのである。

急に百姓の動く気配が読みとれなくなり、小猿はあわてた。敵は物音を消し、こちらにむかってくる。

練達した忍者は、敵の気を読み体臭を嗅ぎとることができるといわれる。これはいかんと、小猿は心魂を澄ませ、よどんだ樹間の変化を嗅ぎとろうとした。

羽虫のようなものが鼻先を飛びまわり、小猿が思わず顔をしかめたとき、右ななめうしろに気配を感じた。

ふりかえると、一文字笠をぬいだ乱髪の敵がくさむらから立ちあがり、襲いかかってきた。

小猿はとっさに手裏剣を投げたが、眼ざとい相手は身をかわし、小脇差をひらめかせ斬りつけてくる。

「小猿なっ」

小猿はしゃがんだまま、蜘蛛のように一間ほども跳びさがり、敵が踏みこんでくるとさらに大きく間合まあいをあける。

「そりゃあっ」

小猿は手もとにひき寄せた手裏剣を、敵の股のあたりへ投げた。

もっとも避けにくいところを狙われたのに、敵は身を一回転させ、ふたたび小猿の攻めを凌いだ。

小猿は手貫てぬき緒おを引かず、そのまま十字手裏剣を帯のあいだからひき抜き、投げた。笛のような音をたてて飛んだ黒い鉄片は、草を踏みにじり頭髪をさかだて斬りこんできた敵の顔を、正確にとらえた。

「わあっ」

敵は悲鳴をあげつつ、小猿に体当たりしてきた。

小猿は敏捷に身をひらき、足を払う。倒れこむ敵は、とっさに身を丸め、二、三度もんどりをうって立つなり、向き直らず、疾風はやてのいきおいで坂の下手へ逃げ去っていった。

「しまった、逃がしたか」

小猿は棒手裏剣を持つ手をむなしくおろした。

十字手裏劍は敵に当てやすいが、深手を負わすことはできない。敵はおそらく片眼を傷つけられたので、逃げたのであろうが、木の間を伝って手裏劍の追いうちを浴びないようにする手際は、熟達した忍者のものであった。

「これはいかな、儂としたことが下手なことをした」

小猿は敵のあとを追おうかと考えるが、思いとどまった。

うかうかとあとを追えば、かえって敵の術策にはめられることが多いのである。わが身をさきに敵にさらすのは、忍者にとって命取りの不利な条件であった。

小猿は背負い袋の紐を締め直し、さきへいった兵介と千世のあとを追った。

二人は峠の破れ堂の縁に腰をおろし、休んでいた。

「若さま、私は下手をいたしました」

早走りですべて登ってきた小猿は、額の汗をぬぐいつつ、眉根を寄せた。

「あとを尾付けてくる奴は、二人おましたが、一人を逃がしてしもうて」

兵介は小猿にいう。

「お前から逃がれたほどの相手なれば、なみの手練ではなからう。やはりそやつらは山賊か」

はだらな雲が去って、陽射しが冴えわたり、破れ堂のまわりを埋める薄の銀の穂を眩しく浮きたたせる。

色のうすい赤とんぼの群れが、いつとき宙にとまり、羽根をかがやかせてゆく。

「儂に何の恨みがあるのか。朱元結と申す者は、石見の国ならば三百人も同勢をひきつれて掛かってもこようが、この辺りならばさようなことはできない。執念ぶかく細作にあとをつけさせ、石見に足をふみいれたところで、殺すつもりか」

敵の正体が分らないので、いつどのような手段で襲いかかってくるか、見当をつけにくい。峠を下りると、毛利家陣屋のある府中の町は近い。兵介たちは府中の手前から北に道をかえ、清末を通って萩にむかうのである。

尾けられるのを用心しての廻り道であったが、敵がすでに兵介主従の動静をつかんでいるいまとなつては、無駄な骨折りであった。

「あの辺りの木の間に、細作が隠れておるかも知れぬのう。一人をお前に殺されたからには、こんどはたやすく姿を見せまい」

兵介は周りの気配をうかがいつつ腰をあげる。

彼は弓を手にして先頭にたち、峠を下りてゆく。怪しい物影を見れば、間をおかず矢を射かけねばならない。敵が埋伏しているようなしげみには矢を射込み、変化のないのをたしかめ通りすぎるのである。

「あやういといえ、火繩筒で射たれることや。用心してゆこう」

木蔭からの狙撃は、一町はなれた谷のむかいからでも命中することがある。

猟に熟練した杣人さやびとにつけ狙われれば、危険きわまりない。兵介は山腹にゆれうごく枝葉のうえに、ゆっくりと視線を這わせる。

耳目をそばだて油断なく進むとき、兵介の身内に精気がわきあがる。彼は犬死にをすまいと心に決めていた。山賊ごときに殺されるものかと、気をはりつめて歩む彼の背を、千世はたのもしげに眺めていた。

彼女は小人数の長旅に、使い慣れた小薙刀を持参しなかったが、煙玉けむりたまの鳥の子を数十個納めたつづらを背負っていた。